JICA ボランティア活動報告　８　　２０１８年６月

北橋　雅子

いよいよ６月です。帰国まで秒読み段階に入りました。この報告も最後になるのですが、最後は２回に分けさせてください。まずは、最後の報告パート１です。前回の報告で書いたゲームプログラミングの特別コースについて報告します。パート２で、課外活動として続けてきた絵本の読み聞かせ活動の報告をします。

２年生を対象として、ゲームプログラミングのプロジェクトをやりました。モザンビークの昔話をＷｅｂ絵本にして、大学のサーバーで公開し、そこに、簡単なゲームを載せよう、という目標に向かってやってみました。HTML と JavaScript を使って、プログラミング初心者でも、簡単なゲームをつくることができます。

去年教えた１年生の中の、優秀な学生に声をかけたのですが、去年の１年生は７０人いて、私の特別授業に合格したのは、１０人に満たなかったのです。さらに、その中で、このプロジェクトの内容を理解できると思われる学生は５人しかいませんでした。その５人の中の特に優秀と私が判断していた２人が、２年生のクラスに登録していませんでした。これは、ショックでした。授業料の問題か、それとも、他の大学へ移ったのか、理由はわかりません。

他の学生が参加するのも拒みませんでしたが、彼らは内容を理解できないので、結局脱落しました。実質３人のためのプロジェクトでした。１人が脱落して、最後までできたのは２人でした。でも、この二人は、オリジナルと呼べるゲームを作成することができました。これは、大きな成果です。この成果を、学部長や先生達に見せると、彼らは驚くとともに、とても喜んでくれました。下の写真は、最終発表会での記念写真。

先生達は、いくら教えても学生が理解しないので、やる気を失くしているし、どう教えればいいのか、わからないのです。モザンビークでは基礎教育体制が整っていないので、基礎学力が十分でない学生がたくさん大学に入ってきます。基礎がない学生が、大学の授業についていけないのはしかたがない、と言ってしまえば、それまでです。もうひとつ、大きな問題があります。それは、評価の仕方です。学生の実力を評価する術がないのです。学生自身も自分の実力を把握していない、と言っていいでしょう。

どうしてそうなのか、ここで詳しい説明は省略します。とにかく、私としては、まず、学生の実力を把握すること、そして、優秀な学生に学ぶ機会を与えること、これが今、この大学、この学部に必要なことだと、訴えました。もちろん、この訴えはスルーされました。いくら言葉で説明しても、それだけではわかってもらえないのです。だから、優秀な学生に、その実力に見合った課題を与えれば、大きな成果が得られることを見せたかったのです。最後に、その成果を見せることができて、本当によかったです。

Ｗｅｂ絵本とゲーム、そして、プロジェクトで使ったいくつかの教材を、大学のサーバーで公開し、このプロジェクトを続けたい、と学部長も先生達も言ってくれました。

さて、今年の１年生はシステム管理コースが２クラスで７０人、ソフトウェア開発コースが１クラスで３０人、合計１００人です。私の特別授業に合格したのは、システム管理コース２２人、ソフトウェア開発コース１８人でした。去年はシステム管理コースだけで、70 人中 10 人未満の合格者だったので、それよりは合格者の割合が増えたことになります。これは、去年よりテスト前の練習問題を入念にやったからでしょう。

何度も練習問題をやったので、学生はテストのパターンを覚えたはずです。その通りに計算すればできるのです。しかし、それができたからと言って、必ずしも本当に内容を理解しているとは限りません。実際、ちょっとパターンを変えるとわからなくなる学生が多かったです。それでも、学生の実力に見合った練習問題をたくさんやらせれば、基礎学力が十分でない学生も少しずつ理解が進むのではないか、という手ごたえを感じました。

1 年生の授業は特別授業だと、学生達に説明していました。つまり、大学の正規の授業ではないけれど、コースの最後にテストをして、合格したら証書を出す、ということにしていたのです。上の写真は、合格した学生達との写真です。学部長もいっしょに写ってくれました。今期、学部長が変わったことは、前の報告に書きましたが、新しい学部長は女性

です。下の写真は、ソフトウェア開発コースの学生達です。女子学生は少ないのですが、この写真の前の二人の女子はとても優秀です。学ぶ環境が必ずしも整っていないこの国で、この学生達が学ぶことを諦めず、国の役に立てるエンジニアに育ってくれることを、願っています。

証書は、大学の名前と、学部長のサイン、それに私のサインで発行しました。学部長は証書の発行にとても協力的で、証書のコピーを記念に保管しておく、と言って、コピーにもサインさせられました。彼女はこの学部には、問題がたくさんあってね、と話してくれました。彼女がもっと早く来てくれれば、いっしょに対策を考えられたのに、と思うと残念です。私が活動してきた軌跡が、彼女の役に立てればいいのですが。

モザンビークでは、帰国前に配属先への最終報告会というのがあります。その報告会で、私が問題だと思ったことを全て報告しました。それらの問題は後任ボランティアといっしょにがんばれば、きっとなんとかできるはずだと力説しました。学部長はちゃんと聞いてくれました。やり残したことはたくさんあるのですが、最後に、この学部長に会えてよかったと思いました。

学部長とコースコーディネータのミゲルと 3 人で最後の記念写真です。ミゲルは、この写真では素敵な笑顔ですが、いつもは、不機嫌な仏頂面なのです。その笑顔をもっとみんなに見せなきゃだめだよ、と言って別れました。